

(加世田市上加世田)

位置と環境

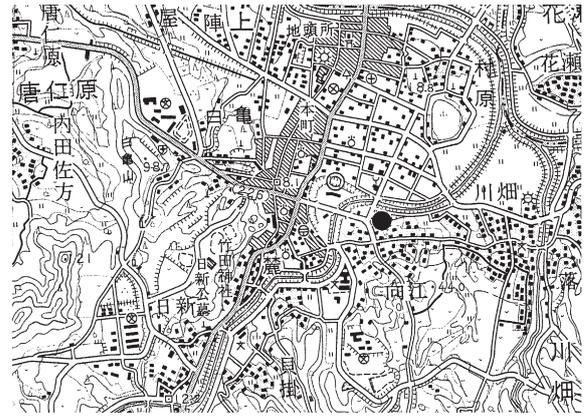
上加世田遺跡は、薩摩半島の南端に近い加世田市川畑にある。金峰山地は半島を縦走しており、分水界は東側の鹿児島湾岸に偏っている。従ってこれに源を発する万瀬川は、諸流を集めて、薩摩半島では川内川に次ぐ長流となっている。流域には平野と丘陵が混交して、その間に知覧・川辺・加世田などの町が古くから発達した。半島の西岸には串木野に始まり野間半島の基部に及ぶ吹上の大砂丘が発達している。金峯山地とこの砂丘の間の海岸平地には、低い台地が分布し、これに多くの遺跡地が立地しており、上加世田遺跡もその一つである。

上加世田遺跡は、加世田市の中心街から東方へわずかに800mの距離にある。遺跡地は標高20mの河岸段丘で、その崖下を万瀬川の支流加世田川が曲流し、周辺の水田面からの比高は約8mである。昭和43年に、国道270号線から分岐して、県道向江白亀線が、前記の段丘を二分して東西方向に建設された。この工事によって、段丘西北端の上加世田遺跡が発見されたのである。

調査の経緯

昭和43年、前記台地の西端に近く、新設の県道向江白亀線に沿って北側に、田頭自動車修理工場建設のために、台地を掘削して県道並みに掘り下げる造成が行われた。同年9月、吹上高等学校生徒当房満也が、同地が遺跡である事を発見し、通報を得て筆者ら同好者が、昭和43年10月10日、造成地に沿って、台地面をa・bトレンチを設けて発掘した。bトレンチは1m掘り下げで終了したが、aトレンチは片鱗も発見できなかった。筆者は翌日より32日間aトレンチの発掘を続け、完掘した。これが呼び水となって6次に渡る調査を行い、上加世田遺跡の全貌を把握できた。市や国県の援助を受けたが、調査者は終始ボランティア活動であった。調査は次のように行われた。上加世田遺跡調査年次

第1次調査 昭和43年(1968)10・10～11・10 加世田3号, 考古学ジャーナル30号



第1図 上加世田遺跡の位置

第2次調査 昭和43(1968)12・25～44(1969)1・5

第3次調査 昭和44(1968)8・11～8・18

第4次調査 昭和45(1970)12・25～46(1971)1・7 71年上加世田遺跡発掘概報

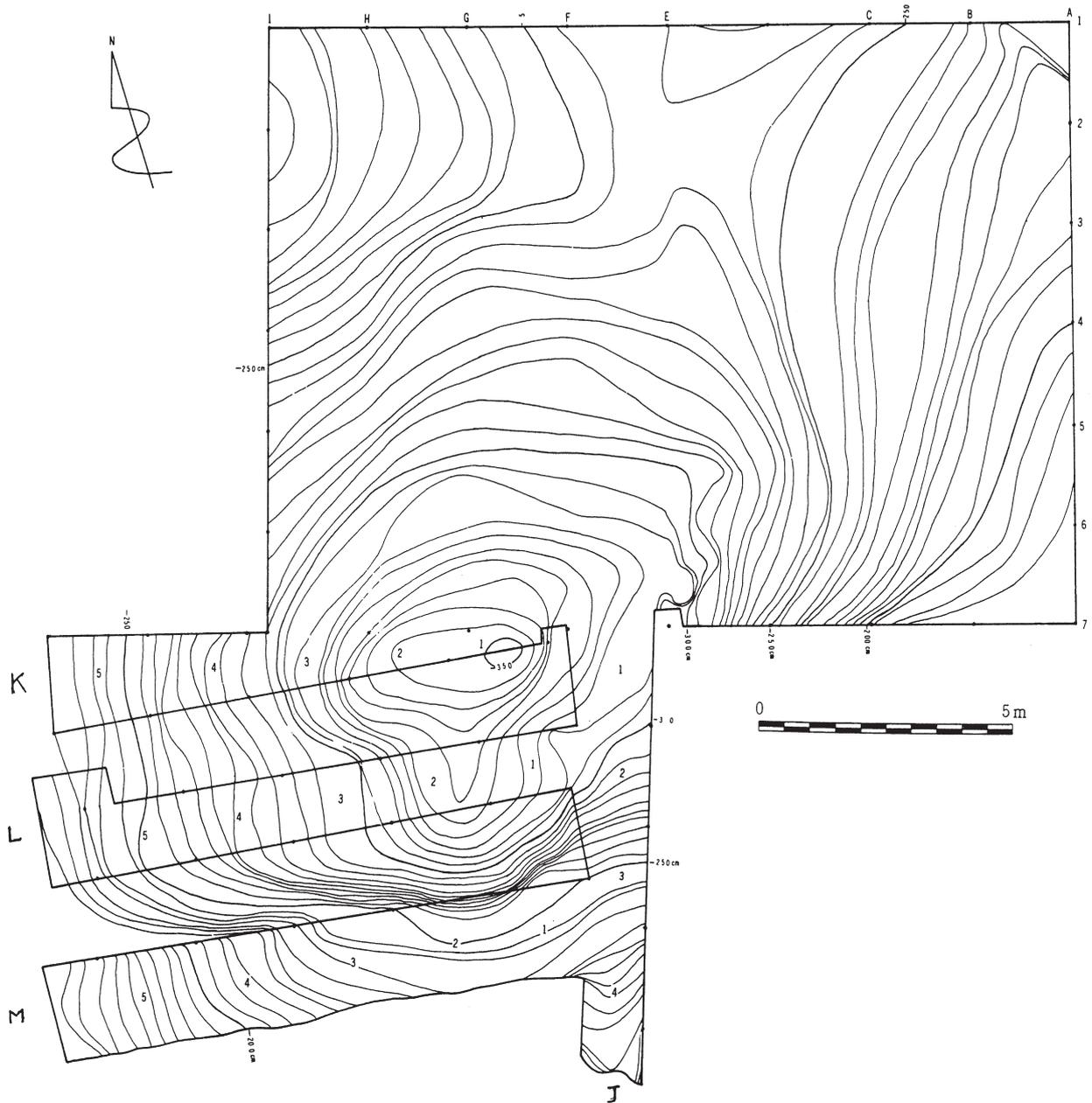
第5次調査 昭和46年(1971)12・25～47(1972)1・6 72年上加世田遺跡発掘概報(第5次)

第6次調査 昭和48(1973)3・2～3・13 鹿児島考古第7号, 上加世田遺跡

遺構と遺物

遺構は南九州では、初めて発見された、縄文晩期初頭の上加世田式(遺跡名を取って命名)期の大集会場遺跡である。同類の遺跡は、同じく縄文晩期の大分県大石遺跡がある。上加世田遺跡の集会場は、六次に渡る発掘の結果明らかになったもので、地表下1mから掘り込まれ、地表下3.50mに達するもので、遺構表面の形は、長径46.42m、短径40.47mの楕円形であり、掘り込まれた深さは最低箇所で2.50m(地表から3.50m)の播鉢状の大きな窪地である(第2図)。

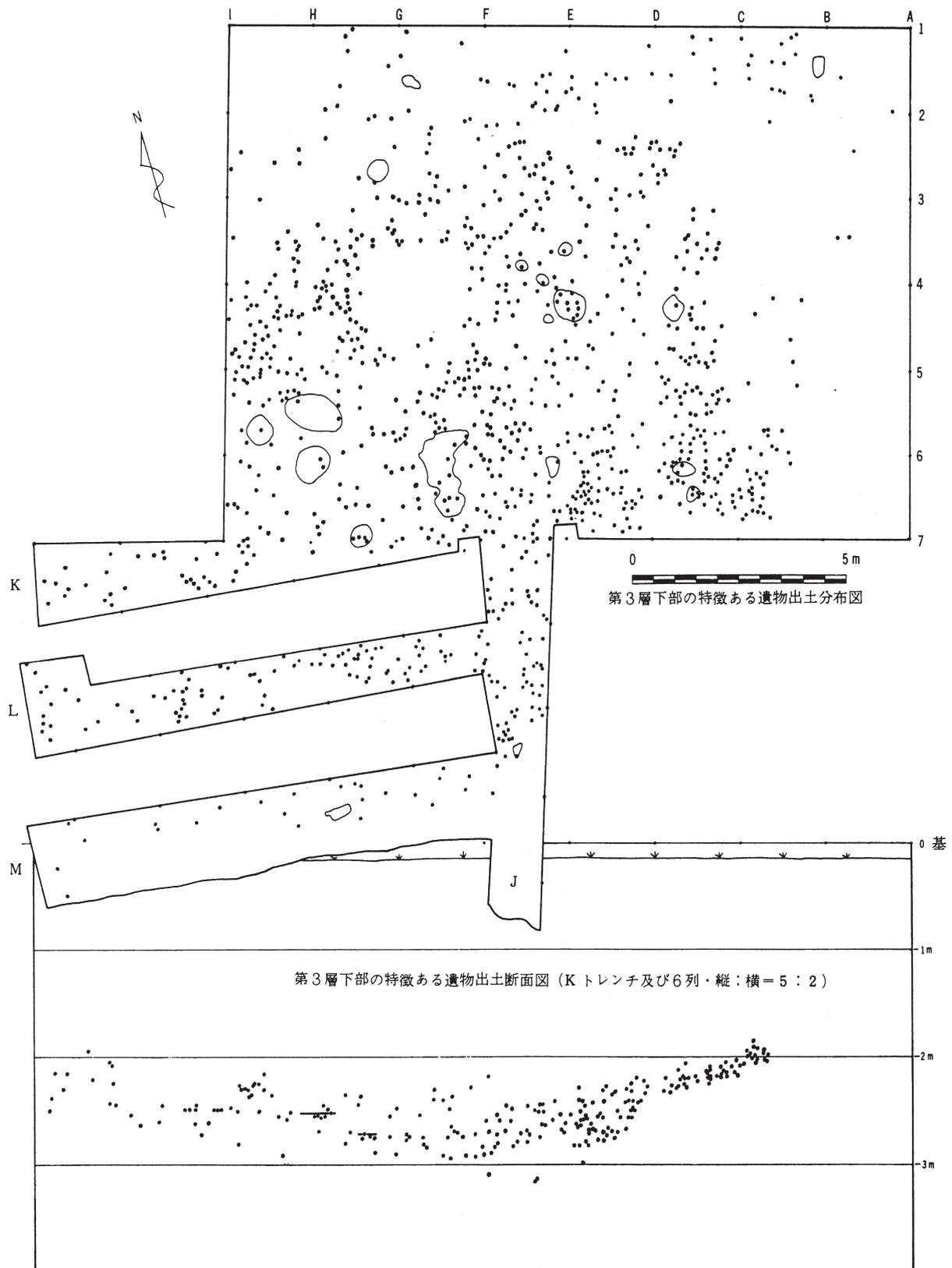
層序は、1層、2層は無遺物層で、3層が上加世田式土器の包含層で以下は無遺物層であった。第2図は第3層を掘り上げた状態を、地表を基準として-1m以下3.50mまでの地形を5cmの等高線で現したものである。中央やや下部の最深部の他に中央より東に楔状の地隙がある。排水溝は設けていないが、下層の砂礫堆積地層の上に形成された遺跡である為に、窪地であるにもかかわらず、雨水が溜まった形跡はない。4千年～3千年前は、地球的規模



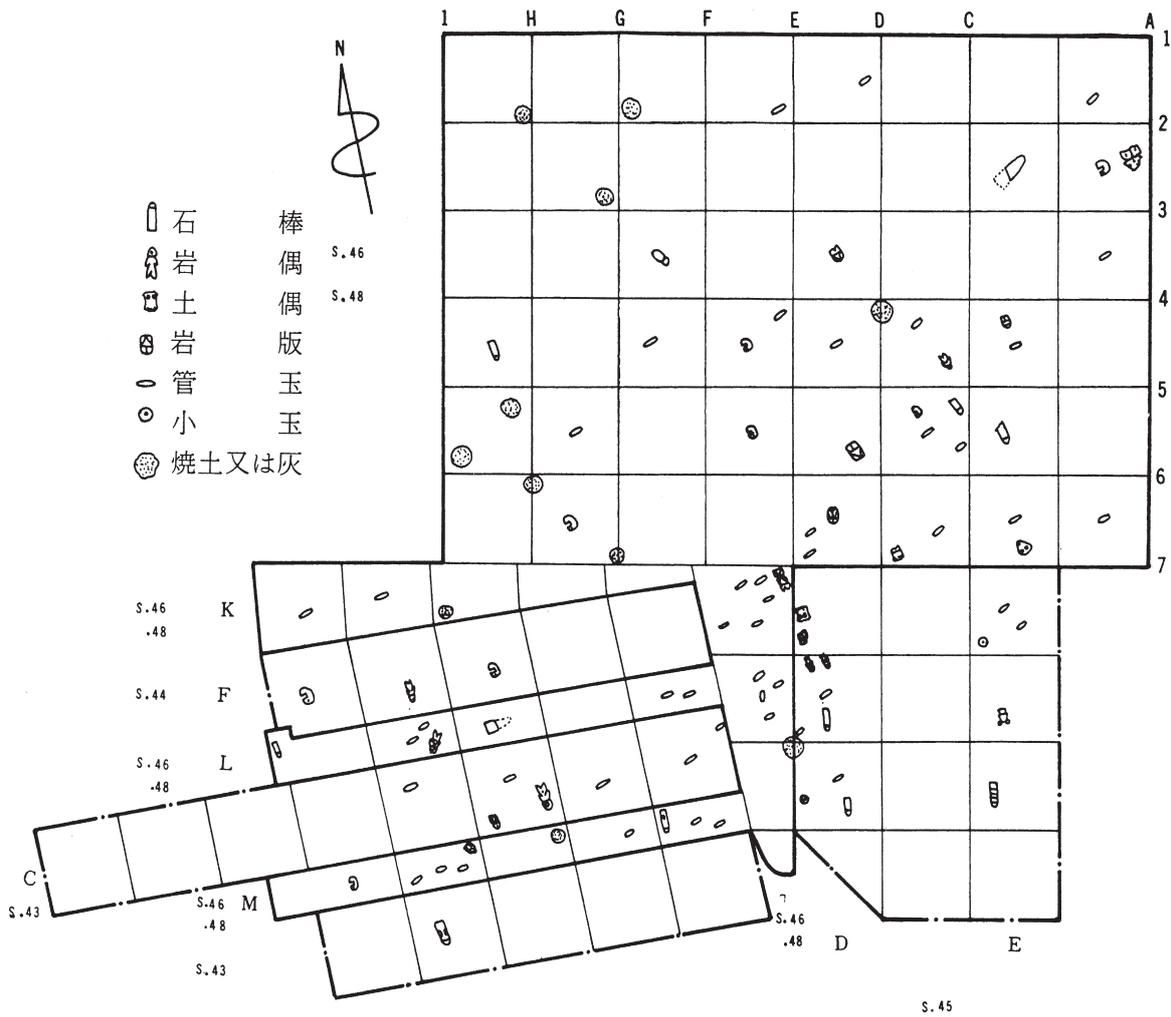
第2図 上加世田遺跡第3層地形図

で冷涼湿潤な気候1)と言われており、続く3千年以降は温暖な照葉樹林気候に移行した。上加世田遺跡でも、第3次調査で貯蔵穴から出土した堅果は、ことごとくイチイガシであったことが、その事を示している。環境の変化に応じて、上加世田遺跡では、大量の打製石器が土堀具として製作され、縄文時代始めての大集会場の掘削を可能にした。この遺構が形作られたのは縄文時代晩期初頭であるから、現在より約3,000年以前であるが、この窪地に於ける第3層の堆積は2.50mに及ぶものであるから、この遺

構の継続期間は長期に及ぶものであることが考えられるが、具体的に数字の上では、上加世田式の継続期間に見合うものと考えられる。晩期の土器型式は上加世田式・入佐式・黒川式・夜臼式の4型式である。晩期の継続期間を600年とすると、単純に同期間とした場合に、一型式の継続期間は150年となるが、上加世田式の継続期間は、諸条件から推して、長期に渡るものと考えられ、200年をこえるものとおもわれる。従って上加世田遺跡の集会場は200年に及ぶ間継続したものと思われる。



第3図 上加世田遺跡遺物出土分布図



第4図 年度別発掘区分図

第3図は、長期間に渡って集会が行われ、その様相を示す遺物の水平分布と、垂直分布を示すものである。これによって遺跡の実態が解明される。次に第4図はその内容を示すものである。

南九州は縄文後期では、指宿式・市来式などの地域文化圏を形成していたが、後、西平・三万田・御領の文化が波及し、晩期にいたって広域文化圏に移行し、御領式と重複して上加世田式が盛行した。新しい環境のもとで、縄文的な技巧的な面を残しながら、合理的な大量生産が盛行し、土器・石器にその様相が明らかである。一方軽石製の石棒・岩偶・岩板の信仰、勾玉・管玉・小玉など装飾品の多彩な様相などは、上加世田式土器文化圏の中心であることを示しており、窪地の中心に、只一か所の埋葬は、上加世田式社会を率いた人を祭ったおくつきの可能性がある。

資料の所在

出土遺物は、加世田市郷土資料館に展示・保管されている。

参考文献

安田喜憲1982「気候変動」『縄文時代の研究』1 雄山閣

(河口貞徳)